



平和研講演会シリーズ 2003  
2003 IIPS Lecture Series  
“国際社会の新たな課題とわが国の役割”

エズラ・F・ボーゲル ハーバード大学教授  
「中国の台頭と東アジアの変容  
(The Rise of China and the Changing Face of East Asia)」  
2003年12月8日 於:キャピトル東急ホテル

世界平和研究所は、日本財団の助成を受け、12月8日、キャピトル東急ホテルにてエズラ・F・ボーゲル・ハーバード大学教授の「中国の台頭と東アジアの変容 (The Rise of China and the Changing Face of East Asia)」に関する講演を開催した。

エズラ・ボーゲル教授は、講演の冒頭で、中国の経済成長は速く、現段階でも約一億五千万人もの余剰労働力が存在するとみられるため、種々問題があるとしても、今後も二十年ほどは高度成長が続く可能性が大きいのではないかと指摘し、さらに以下のように続けた。



中国の産業構造の高度化は進んでいる上、沿海部に比べ内陸部の発展は遅れているため、今後もかなりの成長余力が存在する。また、中国の社会ならびに思想の変化は大きく、さまざまな批判はあるにせよ、中国が民主化の方向に向かっていることは間違いない。加えて、中国は、有能な若手を幅広い分野に積極的に海外留学させるなど指導者層の養成についても力を入れており、この方向性もやはり変わらないと思われる。

次に、中国の民主化については、欧米諸国などと比較すればはるかに遅れており、その進展も急激には望めないと思われるが、当初は「共産主義内での民主化」と呼ばれるプロセスを進めながら、総体としては民主化を深化させていくであろう。また、中国の外交も、共産革命の全世界への輸出を目指してきた頃から比べれば、はるかに現実的、堅実なものとなっている。

一方、米国の変化については、9.11テロ以降、テロ対策が強化されたが、やや過剰反応があるようにもみえなくもない。ちなみに、私見であるが、世論は5年後、10年後にはイラク戦争は間違いであったという結論をだすのではないだろうか。だが、こと中国との関係で見れば、ブッシュ政権成立直後とは異なり、9.11テロ以降、米中関係は密接なものとなってきた。同様に、中国も対テロという方向で米国との共通点を見だし利用している。また、台湾問題はロビーなどさまざまな活動もあり、き



この講演会は日本財団の助成事業により行っております。



わめて重大かつ困難な問題であるが、米国は中国がひとつであることには反対はしないで  
あろうし、中国も米国の動きを無視しえないだろう。北朝鮮問題については、交渉しにく  
い相手であり、六カ国協議を通じた中国の役割期待が大きいと思われる。

さらに日本の政策関連では、日中間での  
歴史問題が大きく、良好な日中関係の構築  
のためには、その根本的な解決が必要とな  
ろう。また、東南アジアとの関係について  
は、以前のような経済援助の重要性は薄れ  
てきており、人的交流などの分野が重要で  
はないか。安全保障問題については、20  
年後くらいには、中国がきわめて強力な軍  
事力として台頭する可能性があると思わ  
れるが、単独での安全保障体制整備の政策  
よりも同盟国との協力が重要であろう。

最後に、エズラ・ボーゲル教授は質疑応  
答を行う中で、China as #1 となるには相当の期間が必要であると指摘した他、依然とし  
て中国には懸念すべき問題も多いこと、チベットや台湾への武力行使（鎮圧）などは起こ  
りうることなどに言及し講演を締めくくった。

